

『20代半ばにひきこもって  
いたとき書いていたもの』

もちろんだひろし





# 目次

|                             |   |
|-----------------------------|---|
| ひきこもり時代に書いた文章ぱーと1 . . . . . | 1 |
| ひきこもり時代に書いた文章ぱーと2 . . . . . | 3 |



## ひきこもり時代に書いた文章ぱーと1

なぜなのだろうか。なぜこうもうまくいかないものでしょうか。なぜこうもむなしいのか。むなしいからこそ人生なのか。しかし、むなしいだけの人生に何の意味があるのか。人生とは、死に向かって、無駄な時間を過ごすことなのか。それはあまりにも残酷ではないか。

そんなことを考えながら、今宵も酒を口にする。李白は酒一斗で詩百篇だが、私は、酔って、ただ漫然と、過去に安らぎを見出し、自慰とも言えるべき想いをめぐらすだけである。詩の一行たりとも浮かびはしない。そしてまた今宵も酒に溺れてゆく。ああ、これぞ我が人生かな。

人生とは何なのか。それは死に向かって突き進むことなのか。それでは生とは限りなく死に近いものではないか。だからこそ、過去は美しく思えるのであろうか。時が経てば、そのときは耐え難いほどつらかったことも、「あの頃は良かった」になる。それでは、今のこの苦しみ時間が経てば「あの頃は良かった」という言葉に塗られてしまうのか。そんな気もするが、それではあまりにもばかばかしいような気もする。しかし、そうあったほうが気楽でよい。

大学の時だった。確か一年。そして土曜日。夜の七時頃。私たちはサークルのゼミをやっていた。法律である。その日、火事があった。キャンパス内の建物の一つが燃えたのである。耳をつんざく消防車のサイレンと、なんともいえない煙のにおいで、火事と解った。私たちは外へ飛び出した。周りの様子から、火事の現場のほうへいった。ただそれだけだ。別に火事に意味はない。ただ、それを見に行くときだ。ゼミの女性と一定の間を保ち、二本の平行線を描くようにして歩いていった。夜のざわめきのせいか、火事の炎のせいか、私の心はざわめいた。少なくともそう思った。

特にその女性が好きだった訳ではない。つまり、その人を恋人にしたい等と思っていたわけではない。単に、女性に対して臆病な私が、女性とデートしたことのない私が、女性

と手をつないで歩いたことのない私が、少しだけ彼女に、女というものを感じたせいかもしれないし、そうでないかもしれない。今でもよく憶えている。しかし、夢を見ていたような気もする。ただ、過ぎたことは美しいということで思い出ただけである。ちなみに、彼女はアメリカに留学している。夏には帰るかもしれないとのことだった。(現在、彼女は国連の職員として、ニューヨークの国連本部で働いている。)

## ひきこもり時代に書いた文章ぱーと2

死に魅力を感じたら。自殺の魅力にとりつかれたら、それから逃れることは出来ない  
誰かが書いていた。(たぶん、芥川龍之介だったと思う。)確かにその通りかもしれない。  
しかも、死ねないでいるのだ。それが一番つらいことなのかもしれない。

なぜ、不安に襲われるのか。どこからともなく、とめどなくわいてくる不安。どう説明  
すればよいのか。すべてのものを飲み込んでしまう不安。それ自体は不確かだが、不安  
があるという事実だけは確かである。過去の希望、思い出の美しさをも、我が身に重く  
のしかかる十字架に変えてしまう。

不安の中であって、希望を見いだすことは困難である。不可能のようにも思える。それ  
はつらいことであろう。死すら安らぎに思えることすらあるだろう。しかし、不安の渦  
中に留まっていることは、耐えられることではない。何とかしてそこから抜け出さなく  
てはならない。何としてでも、勇気を持てばよい。方法はたくさんある。君は最も強力か  
つ確実な自殺という最終兵器すらもっているではないか。しかしそれは、安易に使って  
はならない。最終兵器は存在することにのみ意義があり、使わないことが望ましいのだ。

もがいている。ひっしにもがいている。この暗闇から抜け出そうと、ひっしになっても  
がいているのだよ。いつ抜け出せるのか。果たして抜け出すことが可能なのか。そんな  
不安と戦いながら、ひっしになってもがいているのだよ。誰に助けを求めることもなく。  
しかし、まずは誰かに助けを求めることが必要なのだ。しかし、本当に助けが必要なと  
き、なかなか助けを求めることが出来ない。なぜだか解らないが、助けを求めることに  
すら不安を感じてしまうのだ。助けを求めるにしても、核心の部分には触れずにおいて  
しまう。なぜなのだろうか。不思議なことだ。しかし、立ち止まっていることは許されな  
い。前に進まなければならないのだ。そうすれば、先は自ずから開けてくるはずだ。そ  
う信じようではないか。

---

20代半ばにひきこもっていたとき書いていたもの

---

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---